

海嶺

下

三浦綾子



海嶺

下



三浦綾子

海
嶺
下

一九八一年四月二〇日 第一刷発行
一九八一年七月一日 第三刷発行

著 者 三浦綾子

発行者 初山有恒

発行所 朝日新聞社

東京都中央区築地五丁目三番二号

〒一〇四 電話代表〇三(54)〇一三一

振替 東京〇一一七三〇

〔編集〕図書編集室 〔販売〕出版販売部

印刷所 凸版印刷株式会社

定 価 一、二〇〇円

海嶺・下・目次

迷える羊	3
濃霧	23
イーグル号	30
椰子の木の下	57
南海	84
霧の都	104
ゼネラル・パーマー号	131
奴隸海岸	145
マカオの空	159
ロゴス	180
合流	214

岐路

241

ああ祖国

262

創作後記

325

参考文献並びに資料

333

海
嶺
下

迷える羊

一

九月も半ばに入った。即ち三人がフォート・バンクラーに来て、三カ月は過ぎようとしていた。九月に入るとフォート・バンクラーの風は、俄に寒くなった。それは涼しいというより、やはり寒いといったほうが適切なほどの冷たさであった。およそ北緯四十六度に近いフォート・バンクラーの位置は、宗谷海峡の緯度と同じである。六、七、八月は、雨も少なく暑い日がつづいた。それが九月に入ると、ばたりと暑さが去り、俄に太陽が遠のいた感じだった。この幾日か雨がつづいたが、それでも今朝は、青空は見えないまでも、雨は止んでいた。

今、岩松は、洗面台の上の壁の鏡に向かってひげを剃っている。薄刃のレザーを巧みに使いながら、

「音、昨夜明け方な、俺は親方の夢を見たで」

と、鏡の中の音吉を見た。十六歳の音吉はまだひげを剃るまでもない。グリーンからもらったノートに、鉛筆で単語を書きとめていた。音吉は暇さえあれば、ノートをひらく。英語を覚えたいというより、学ぶことは何でも、好きなのだ。ここに来て三カ月、日曜日以外は朝の学校と、つづくグリーンの、二時間の特別教授で、三人は次々と言葉を覚えていった。新しい言葉が、毎日流れこむように耳に入ってくる。音吉はその言葉を、日本への土産にしたいと思っていた。そして、できれば簡単な通辞ぐらいはできるようにになりたいと、近頃は考えるようになった。だから尚のこと、ノートに書きつけることが多くなる。

今ひらいた音吉のノートには、十二カ月の月の名、四季の名、曜日が整然と記されている。

(セプテンバーやな、九月は)

そう思った時、岩松に声をかけられたのだ。

「親方さんの夢？ 親方さん、どんな様子やった？」

ノートを閉じて、音吉は椅子から立ち上がった。久吉は便所に行っていた。便所は外便所なのだ。

「うん、親方なあ、元気な顔で飯を食うていたで」

「さよか。元気な顔で、飯をなあ……」

音吉はふっと胸が詰まった。重右衛門や兄の吉治郎たちの墓が、フラッターの岬にある。ドウ・ダーク・テールの親切な計らいで、墓に別れを告げては来たが、音吉にはひどく心残りなのだ。吉治郎や重右衛門が、せめて骨だけでも日本に持って帰って欲しいと、悲痛な叫びを上げているような気がして、時折夜も眠れなくなることがある。フラッター岬まではかなりの距離だが、日本に帰る時、あの墓を掘り起こして、骨を良参寺に持って帰り、和尚に懇ろに弔ってもらいたいと思う。重右衛門の夢を見たという岩松も、きっと心にかかっているにちがいない。

「うん。白い歯を見せてな。つやつやした顔だった。何を言いたくて夢に現れたのかなあ」

「ほんとになあ」

音吉は、重右衛門のありし日のひげを剃る様を思い浮かべた。そのひげを剃る重右衛門の前に、久吉と代わる代わるに、鏡を向けていたことを思い出す。

（あれは、かねの鏡やった）

音吉は、ソープをつけてレザーを使っている岩松を見ながら、重右衛門のひげを剃る様を思った。水でひげをぬらしただけで、剃刀でじゃりじゃりと剃っていた。

（親方さんは、ガラスの鏡も、レザーも、ソープも知らないだ）

んだ）

自分たちは正に生き残ったのだと、音吉は改めて思う。

もし幸いにしてあの全員が助かっていたら、どんなに愉快であつたらう。あのフラッター岬にいても、十四人いれば心強かった筈だ。このフォート・バンクーパーに来て、帰る楽しみはもっともっと大きかったと思う。

その時、久吉が部屋に戻って来た。

「寒いわ、今朝は」

言ってから、

「な、舵取りさん。この厠だけは、わしは嫌いや。尻をべたんとつけて、何や気持ち悪いわ。いつまで経っても厠ばかりは馴れせんわ」

久吉は白人たちの真似をして、肩をすくめ両手を広げて見せた。

「ほんとに厠はわしも好かん。ここに来た最初は、お蔭で何日も通じがなかったわ」

「厠は岬のほうがよくあったわな。日本と同じだったでな。穴を掘った上に、板を渡しただけやったでな。あのほうが簡単でよかったわ」

「そうやな、鹿の声が聞こえたりして、風流やったな」

「こっちの厠は、鳥の声が聞こえても、聞く気はあらせん。

尻べたが気になって」

その久吉に、音吉が言った。

「あんな久吉、舵取りさんな、親方さんの夢見たんやって」

「へえー、舵取りさんもか。わしも見たんやで、昨夜。で、

どんな夢やった、舵取りさん」

「ああ、元気で飯を食うてた夢や」

剃り終わった顔に、タオルを当てながら、岩松が答えた。

「何やって？ 飯食うてた!? 何や、同じ夢や」

久吉は驚いて、

「何だかいやややな。親方さんたち、腹が空いて、餓鬼になつたんところがうか」

久吉の言葉に、音吉が言った。

「餓鬼になんぞならせん。な、舵取りさん」

「ああ、餓鬼になんぞなる人やない。ちゃあんと成仏したわ」

「したら一体、何で同じ時に飯を食う夢を見たんや」

「まあ、そんなこともあるやろ。たまにはな」

「それはそうやけど、でも気になるわ」

久吉は珍しく夢を気にした。

「さ、朝飯やで。早う飯を食うて、スクール・チャーチに行かなならんで」

岩松は気にもとめぬふうであった。ガラス窓越しに、ボブラの木がしきりに風にさやぐのが見えた。

二

三人がフォート・バンクーバーに来て、驚いたことはたくさんあった。七日目毎に、村中の人がマクラフリン博士の広間に集まって、礼拝を守ることその一つだった。この日ばかりは、造船所も、店も、管理事務所も休みであった。畠を作っている者たちまでが、畠仕事を休んで教会に来る。そしてその日一日は仕事を休んだ。

「奇妙な習慣やな」

先ず第一に岩松が驚いた。

「ほんとやな。七日目七日目に仕事休んで、商売になるんかな」

久吉も相槌を打った。

「日本では、朔日しつじつと十五日、そして盆と正月くらいやな」

「そうや。うちの父ちちさまは、漁師やから、恵比須講には休むがな」

「そうやそうや。そして職人は太子講に休むぐらいや。こんなに七日目七日目に、何で休まにゃならせんのかな」

三人は不思議がった。が、久吉が言った。

「けど、休みの多いのはいいことや。朝から晩まで、毎日働いたら、隣村にもなかなか行けせんぞな」

三人はそんなことも幾度か話し合ったものだ。

「これで、お詣りがなけりや、サンデー（日曜日）はまるまる休めるのにな。そこらが奇妙なところや」

教会に行っても、話がわかるわけではない。それでも、三カ月経った今では、随分わかる言葉が耳に入るようになった。

英国では十七世紀の半ばに、既に日曜日遵守法が出来た。日曜日やクリスマス、復活祭などには、営業も労働も禁止する条令であった。だがそれは、一世紀程で途絶えた。産業革命がその条令を押しやり、労働時間は十四時間から十六時間にも及んだ。そして更に八十年程経った一八三三年、イギリス工場法が制定された。岩松たちはイギリス工場法制定の翌年に、このフォート・バンクパーに來たのである。工場法は制定されても、日曜日の休業はまだ制定されていなかった。マクラフリン博士は、もともと信仰が厚かったから、聖書の教えにもとづいて、日曜日にはその屋敷を解放し、礼拝を守らせていた。博士の家は私邸というより公邸の趣があった。

朝食を終えると、三人は背広を着、日曜学校に出かけて行った。女の子たちが、腰のふくらんだひだスカートをはき、ネッカチーフで頭を包み、みんないつもより整然とした身なりをしている。上等の服を着れるので、子供たちは上機嫌だ。男の子たちも折り目のついた長ズボンをはき、蝶ネクタイをつけている。岩松たち三人も蝶ネクタイだ。だが三人は、この蝶ネクタイが何となく嫌いだ。

「誰も彼もめかしこんで、七日目毎に祭りのようなものやな」

久吉も、今では靴を脱いで歩くようなことはない。朝、みそぎに河に行く時も、きちんと靴を履いて行く。だが履く度に久吉は、

「今しばらくの辛抱だぞな」

と、自分の足に言って聞かせるようにして履くのだ。

いつものように三人は、最後列に坐っていた。オルガンが奏でられ、讃美歌がうたわれる。歌詞はよくわからなくても、曲はいつも覚えやすい曲ばかりだ。子供たちは、所大声を張り上げ、所々口ごもるようにうたい、とにもかくにもうたい上げる。

讃美歌が終わり、祈りが終わって、聖書が読まれた。

「ゴッド イズ ラブ」

と言う所だけは、三人にもわかった。ゴッドとは、どうやら神か仏のようなものらしいと、この三カ月で見当がついている。と、二メートル程の台の上に、教師たちが赤や青や黄色で彩った四角いこれも大きな箱を置いた。子供たちは一斉にざわめいた。一人の教師は更に、箱についていた幕を引いた。背景に峻^{げん}しい崖の絵が描かれてある。その崖下に一匹の羊がいた。人形芝居である。教師が、その羊を器用に動かしながら、羊の鳴き声を真似た。羊は、峻しい坂を鳴きながらよじ登ろうとする。だが羊は、登りかけでは、すぐに谷底にころげ落ちる。教師は、

「かわいそうな羊、この羊は大勢の仲間から外れました。仲間は九十九匹いるのです。この迷い出た羊を入れると、羊は全部で百匹でした」

ゆっくりと、子供たちにわかるように教師は話をしていく。羊は悲しそうに鳴く。やがて、遠くから羊を呼ぶ声が聞こえてくる。羊はその声を聞いて大きな声で鳴く。鳴き声を聞きつけて、峻しい崖を一人の人が降りて行く。「この人の名は、イエス・キリストです」と教師が言った。

「おもしろいな。人形芝居や」

久吉は、音吉の脇腹を突ついた。

「うん」

音吉はうなずきながら、今坂をころがりそうになり、あっちの木につかまり、こっちの枝にすがるようにして降りて行くキリストを見つめた。子供たちはまばたきもせずに、無事に下まで降りつくかどうかと見つめていた。薄茶色の長着を着たキリストは、憐れみ深い表情をしている。キリストは幾度も降りなずんだように立ちどまる。が、時折下の羊に向かって、

「今、行くよーっ。待っているんだよーっ」

と声をかける。その人形の操り方が実に巧みだ。子供たちはひき入れられて、本当にキリストが谷底まで降りられるか、どうかと、身を乗り出して見ている。

遂に谷底に着いた。子供たちが一斉に拍手をした。羊が鳴いた。その羊の頭をキリストがなでる。人形であるその手は、羊の頭をぎくしゃくとなでたのだが、子供たちは自分がなでられたように顔を見合わせてうなずき合った。

次にそのキリストは、羊を肩に負った。

「もう大丈夫だよ。さ、一緒に仲間の所に帰ろう」

教師はいともやさしい声を出して、キリストの人形を崖に登らせはじめた。これも幾度か足をすべらせながらの、はらはらさせる演技だったが、とにかく無事に山の上まで辿り着いた。

これで話は終わりかと思つたが、そうではなかつた。場面は全く変わつて、教師が、

「ここはゴルゴダの丘です」

と、重々しい声で言つた。十字架が立てられ、先程のキリストに扮した人形が、十字架につけられようとしている。その掌に釘を打つ音がする。先程の、羊を助けた人形の掌に大きな釘が打ちこまれるのだ。

「うわあ、痛い！」

久吉が叫んだので、子供たちが一斉にうしろを向いた。もう一方の掌に、また釘が打たれる。

「残酷やーっ！」

久吉がまた叫ぶ。子供たちが再びふり返る。十字架にかかったキリストの下に羊がやってくる。何人かの人形が十字架の下に集まつて来た。

「イエスさまーっ！ わたしを助けてくださつたやさしい方なのに、どうして十字架につけられたのですか」

羊が十字架を見上げて歎く。子供たちが大きくうなづく。教師が語る。

「皆さん、どうしてキリストは十字架にかかられたのでしょうか。悪いことをしたからでしょうか。いいえ、私たち人間の罪や穢れを取り除くために、イエスさまは身代わりに

なつてくださったのです」

久吉は音吉の耳にささやいた。

「あの男、磔松に磔になった長田のような男やな。磔になるのは、極悪人やで」

小野浦の近くには、主君源義朝の首を打ち取つた長田忠致の磔になった松がある。音吉や久吉にとって、磔と言えば、長田忠致がすぐに連想された。磔にされた人間は、長田しか知らなかつた。が、その時、岩松がささやいた。

「音、久！ これはな……これはもしかしたらキリシタンやで」

「えっ!? キリシタン！」

音吉の全身に鳥肌が立った。日本ではキリシタンとわかれば、一族打ち首になると聞いている。

「ほ、ほんとか、舵取りさん」

「うん。多分な」

岩松は腕を組んだ。三人は、マクラフリン博士の信仰が、キリスト教であることを知らなかつた。いや、第一キリシタンなるものを知らなかつた。日本では二百五十年も前からキリスト教は禁制である。一体どういうものがキリシタンなのか、見るにも聞くにもその機会がなかつた。只、岩松だけは北前船に乗っていた時、船乗り仲間の一人に、

「俺の村には、隠れキリシタンがいる」

と、聞かされたことがあった。そしてその時、キリシタンの印は、十の字だと教えられた。この十字架にキリシタンの頭目は磔になったのだと、その時初めて聞いたものだ。今、岩松は人形芝居を見ていてふっとその話を思い出したのだ。三人は今まで、十字架にかかったキリストの絵も像も見なかった。マクラフリン博士の家には十字架の印さえなかった。礼拝を行う部屋は礼拝堂ではなく、博士の家の広間であった。キリストの絵は飾られてあったが、それは両手を広げ、すべての人を受け入れようとするやさしいまなざしのキリストであった。

「アーメン様かと思うたら、キリシタンか。どうする？ 舵取りさん」

「そうやな。とにかく信ずるわけにはいかんわな。話を聞いたと言うただけでも、牢に入れられるかも知れせんぞな」
「大変なことになってしまったな、舵取りさん」

音吉は青ざめた顔を岩松に向けた。教師が、
「イエスさまこそ真の救い主です。この方のもとに集まりなさい」

と、結びの言葉を述べていたが、三人の耳に入る筈はなかった。

三

岩に向かつてなだらかな広い傾斜地だ。野菜畠やりんご園、そして、牛や羊を放牧する牧場がある。珍しく晴れ上がった九月の午後だ。秋の日ざしに青いりんごがつつやと光っている。

「そうやな。困ったことになってしまったな」

岩松は岩の向こうに見える河の輝きに目をやった。岩の中に動く人々が見える。白い犬が見える。馬車のとまるのが見える。河岸を離れる帆船が見える。そしてその向こうに小高い緑の丘が見えた。

「とにかく、明日のサンデーは、腹でも痛うなったことにして、スクール・チャーチは休むことにせにゃ」

久吉は草原に寝ころんで、真上のりんごの木を見上げた。この間の日曜日、自分たちの聞いた話が、どうやらキリシタンらしいと気づいて以来、三人は幾度も幾度も話し合ってきた。そして、遂にまた明日の日曜日を迎えようとしていた。

「なあ、舵取りさん。どんなことがあっても、キリシタンの話はいかんで。耳の穢れだぞな」

音吉の賢そうな目が、岩松を見る。岩松はあぐらをかいていた足を、草の上に伸ばすと、

「そこが面倒なところや。この人らはみんなキリシタンや。日本ではキリシタンは邪宗門だが、ここでは誰も、邪宗門などとは思っておらんでな。チャーチにお詣りに行かねば、仲間外れになろうし……」

「けどな舵取りさん。わしは、キリシタンだけはごめんや。万々一、こっちでキリシタンのお詣りをしたとわかったら、帰ってから逆さ磔やで。おまけに、親も兄弟も同じお仕置きを受けるでな」

「うん。それは言うまでもあらせん。文化何年頃やったかな。どこぞでキリシタンが大勢お仕置きにあったと、聞かされたことがある」

岩松は自分に字を教えてくれた古い師の竹軒を思い出した。長いあごひげを手でしごきながら、

「岩松、キリシタン共は哀れじゃ。何も知らぬ二つ三つの童までが火あぶり、水責めに遭うたものじゃ」

と、語ってくれたことがある。が、竹軒は、キリシタンを邪宗だとは言わなかった。キリシタンの悪口を、ついぞ言わなかった。只、逆さ磔、斬首など、悲惨な最期を話してくれたものだった。

(もしかしたら、あの竹軒先生も……)

キリシタンではなかったかと、岩松は今にして思った。

一六三九年(寛永十六年)以来、日本ではキリシタン禁制が一段ときびしくなり、日本人の海外進出も一切禁止された。中国人、オランダ人以外の異国人が日本に来ることも拒んだ。貿易は統制を受けた。特にキリシタンへの圧迫は異常なまでに激しかった。一六三九年以来、日本からキリシタンは根絶されたかに見えたが、信仰は尚もひそかに受けつがれ、明暦、寛文、寛政、文化の時代にも、幾度か多くの信者がその血を流したのである。つまり、岩松の子供の頃にも、その残酷な弾圧はあったわけである。

日本の町という町、村という村には、寺請証文(ていせうしやうぶん)が出されていた。寺請証文とは宗旨手形、あるいは宗門手形とも言った。寺がその檀徒にキリシタンでないことを証明する文書である。この寺請証文がなければ、奉公に出ることも、嫁に行くこともできなかった。そうしたきびしさの中で、岩松たちは、正体のわからぬキリシタンなるものが、ひどく無気味なものに思われてならなかったのである。

「とにかく、舵取りさん、キリシタンのお詣りには行かんほうがええで。わしは行かん。明日きつと腹が痛うなるわ。腹下りするわ」

久吉は腹をおさえて見せた。

「久、明日一日ぐらいいは腹痛でごまかせても、次のサンデーにはどうするんや」

岩松が尋ねる。

「次のサンデーには頭が痛うなるわ」

「その次は風邪でもひくつもりか」

「そうや。熱でも出してやるわ」

「しかしな、久。そうそうサンデーにばかり体の具合が悪くなつては、仮病とすぐわかるで」

「わかってもかまわん。まさか、お詣りせんでも、逆さ磔になるわけでもあらせんやろ」

「久吉、そりゃわからせん。こっちはこっちの寺請証文が要るのかも知れせん。なあ舵取りさん」

牛が近くでのんびりと啼いた。

「ええなあ牛は。どこの神さんにも仏さんにも義理立てせんでええでな」

久吉は起き上がって、牛の群れのほうに目をやった。

「とにかく困ったもんや」

岩松は暗いまなざしを岩のほうに向けたが、

「わしらが日本に帰るのは、時間の問題や。帰れば第一に聞かれるのが、このキリシタンのことにちがいはあせん。

絶対に宗旨は変えなんだと言いつても、あれやこれやと、しつこく聞かれるに決まっている」

「それがいやや。いややなあ、もう」

久吉は顔をしかめた。

「言葉がわからせんかったと、白を切り通せばええやろか、舵取りさん」

「まあ、そうやろ。それはそうと、キリシタンは日本の役人たちが思うとるほど、悪いとも思えんがな」

「か、舵取りさん！ そんなこと日本に聞こえたら、それこそ大変やで」

音吉が真剣な顔で言った。

「わかつとる」

岩松は苦笑して、

「だからここだけの話や。音、久、よう考えて見ろ。もしキリシタンが、日本で言うほど悪い教えなら、わしらをこんなに親切には扱わんで」

「そう言われればそうやな、音。ミスター・グリーンもドクターもほんとに親切や。俺たちは日本では、役人たちから涙をひっかけられたこともあらせんわ」

「ほんとや。もしキリシタンが悪い教えなら、わしらをこんなに親切にするわけではないわな。キリシタンは生き血を